

都市生活生協支援

第 5 号

1995.4.10

救援ニュース

都市生活現地救援本部
西宮市今津山中町9-9
都市生活西宮センター内
電話：0306181792

第1次現地本部から第2次現地本部へ

2月6日に現地救援本部を開設してから2ヶ月が経過しました。真冬から桜の季節までの間にこの現地救援本部で被災地、被災者、「都市生活」への救援活動に携わった人々は数え切れません。とくに、常駐的にこの本部に詰めていた金森昂作（エル・コープ副理事長）、坂根輝吉、仕事の合間に駆けつけた酒井純（エル・コープ職員）、境毅（エル・コープ理事）、渡辺信英（稲園高校）各氏、多くの学生・市民ボランティアの皆さんに心から感謝します。とくに坂根氏はまるまる2ヶ月を西宮センターで生活され、ここでのすべての救援活動を支えてこられました。また、金森氏は過労から健康を害して、現在入院加療中です。

4月1日から第1次から第2次への引継作業を進めています。引継ぎ期間中は芦屋市を中心に救援活動に取り組んでこられた池田啓一さん現地本部に常動的に詰めてくださっています。地元の方ですから、土地感もあり、いきとどいた救援活動が期待されます。今まで以上に、困っておられる問題を相談してください。

第2次がどのような形になるのかは未だ確定はしていませんが、大阪事業連をはじめとする多くの生協関係者で構成され、中・長期的な運動方針が提示される予定です。その詳細は次号でお知らせする予定です。第1次の救援本部のまとめも次号にゆずることにします。本号は坂根さんの2ヶ月の日誌のまとめを掲載し、救援活動の一端を知っていただければ幸いです。炊き出しも続いています。今後とも力を出し合ひましょう。

第1次現地救援本部の終了に当たって、十分な救援活動ができなかったことをお詫びします。ただ、私はこの2ヶ月間に多くのことをこの被災地で学びました。生協運動の重要性和これからの生協がどのような質を持っているべきかについて考えながらの毎日でした。これからも、救援活動に参加させていただくつもりですが、一応の区切りとして、ありがとうございました。

（第1次現地救援本部長、

エル・コープ理事長 石田紀郎）

現地救援本部での二ヶ月～炊き出し担当

地震直後。「死にたくない」「生きたい」が人々の叫びでした。「生きていてくれ」「助けたい」がひとびとの願いでした。それぞれの人々の心や働きは、今となっては具体的にはうかがい知ることはできません。けれども、当地では、「生きてる」「死んでる」という言葉は、命あるものに対してだけでなく、あらゆるものが機能しているかどうかという意味に使われています。「[阪急は***駅までいきてる]」「***委員会は完全に死んでる」と言った具合です。みんなもの様にものごとを考えていました。「[都市生活]」西宮支部からいち早く出された「組合員の安否調査」がこの段階を表現しています。

ほんの偶然によって助かった人々は、「生き延びたい」「人として生き延びてほしい」と願いました。被災者＝人身に別状があったり、家が壊れたりした人々だけを指しているわけではありません。ライフライン寸断の影響はもちろん”ゆれ”そのものへの恐怖や罹災した縁者との同居による問題の発生などが、複雑にからみあって、それ以前とはまったく異なった生活を送らざるを得ない人々全て＝の中で比較的被害の軽かった人々の手で、ボランティア活動は、始まりました。「都市生活」の組合員さんは、ひとりで、あるいは声を掛け合って、苦しんでいる人々の中へ入っていきました。名谷センターのグループや尼崎支部グループによる炊き出しがはじまり、各センターではそれぞれの事情に応じた事業と救援がはじまりました。

はじめ何をしたいのか戸惑っていた全国の人々から熱狂的な「救援」「ボランティア」の波がわき起こり物・人・アイデア・お金が、淡路島、阪神間に注ぎ込まれました。2号線、43号線の渋滞に象徴されています。「[都市生活]」支援対策本部「現地救援本部」が設置された段階です。炊き出し用食材・器具などが、計画的、組織的に搬入されるようになり、関西の各単協からは組合員さんによる炊き出し現場への応援ボランティアもやってくるようになりました。地震ちよく後のステーション配送を発展させた、二重価格制「救援青空市」もはじまりました。被災者の心や避難所の中にある種の安定感が生まれ、ほっと一息ついたという感じです。

「役立たず」という言葉が、行政関係者でも純民間ボランティアでも使われるようになりました。ボランティアの申し込みがあったり、新しいボランティアが到着した時に「役立たず8人!」とか「また役立たずか」というふうにです。はじめ、何もしなくてもそこ

にいただけでも何となくたのもしかったボランティアに対して、だんだんと、様々な能力が求められるようになりました。ずたずたに引き裂かれた社会生活の

裂け目をとりあえず埋めるだけだった救援活動から、「復旧」「復興」「自立」などそれぞれの立場によって違いはありますが、一定の計画にもとずいた活動が求められるようになったのです。

一旦落ちついた避難所も、「これからの見通しをめぐって、人々の間に新しい動きが生まれ、避難者数に変動しはじめました。軌道にのりはじめた「炊き出し」も、人数の変動と、避難生活の長期化、気候の温暖化などによって新たな対応が求められるようになりました。これまで三日分の食材を一度に搬入していたのが、鮮度低下を考慮して、小口に分ける必要が生じたのです。「もう、豚汁には飽きた」と言われました。大量、一時、温食というだけでは、被災者の現実の要求に答えられなくなり、こまごまとした下拵えをしなければなりません。さらに「都市生活」の配送業務が復活するにつれて、トラック、ドライバーのやりくりも困難になってきました。私たちが「キャンプの食事から食堂の食事



おわび

3月12日の「あいたくて都市生活」に大阪市大生協が参加されていました。編集の手違いで記載漏れになったことをお詫びします。大阪市大生協のみなさん、ありがとうございました。

へ!」「衛生の徹底」「避難者自身による自炊体制援助」を目標として打ち出したころに当たります。

私は市役所の担当者、学校関係者、避難者の代表、ボランティアグループ、医者、喫茶店やコインランドリーで出会った人たちと話し合いました。はじめ、38万人だった避難所の人口は、6万人あまりに減少しています。阪神間のあらゆる空間に建てられた仮設住宅への引越を勘定にいれても、だれ一人として4/5の人々がどこへ消えていったのかを説明できませんでした。おそらく被災、避難者の地域化、社会化が進んでいると思われます。いわゆる「社会的弱者」優先で仮設への入居がスタートしたにも拘わらず、避難所では高齢者の比率が高まっています、芦屋市大原集会所では55才以上が70%を占めています。

これまで一かたまりにあつかわれていた被災者は、バラバラになり、被災という現実を個々人で背負わねばならなくなったのです。そして「社会的弱者」程、その荷は重く、長期にわたるのではないのでしょうか。地域と密着していない避難所では特に、セクハラ、や盗難事件も発生しているとのことでした。

「都市生活」理事会は、「数年にわたる組合員活動としての持続的救援」「地域の再生なくして、「都市生活」の再生はありえない」と決定しました。「対策本部」「現地救援本部」も再編されねばなりません。これからの救援・復興活動は、炊き出しも含めて長期的、計画的できめ細かな、専門技術を伴うものになるとおもいます。

私はこの三ヶ月間、「現地本部」にしながら、ほとんど外にでることができませんでした。電話、ファクス、その事務所へやって来る人たちの表情や話題に頼って判断していました。その間、「炊き出し」を中止した避難所へ、応援のボランティアさんを導いたり、砂糖なしのぜんざい、うどんなしの煮込みうどんや冷蔵庫に山積になっただしじゃこなど数々の大失敗をしてしまいました。改めておわびします。それにもかかわらず、「都市生活」の組合員さん、役員さん、職員のみなさん、関西はいうにおよばず東京、神奈川、四国、九州など全国各地から駆けつけたボランティアのみなさんは怒りませんでした。それどころか、その場の状況に応じた創意に満ちた判断によって心からの救援活動を続けられました。このような自発的で何の報酬も求めない活動は、おそらく「都市生活」関係者だけでなく、淡路島、阪神地区全域で繰り広げられたのだと思います。

現地本部に新しく加わった池田さんは、「救援」⁴「復興」の向こうに見える人間関係のありかたを次のように語りました。

「悩みをひとりで引き受けるのではない社会」と。

以上が三ヶ月の「現地救援本部」のラフ・スケッチです。

坂根輝吉（現地救援本部 炊き出し担当）

お見舞い金をお届けして

生活協同組合都市生活専務理事 角田 学

全国の協同の仲間から今回の被災に対して、あたたかい救援カンパが寄せられています。都市生活生協理事会では、被災した組合員への直接的な支援として、このカンパの一部を「お見舞い金」として渡していくことを決め、3月27日より申請を受付けています。

4月13日現在、申請状況は下のとおりです。本人・家族の亡くなられた方（4件）には、連絡を差し上げたうえ、可能なぎり直接うかがってお渡しするようにしています。

小学校3年生の娘さんを亡くされた西宮のKさん宅には、副理事長前川と角田でうかがい、ご焼香のあとお見舞い金をお渡ししました。娘さんのお話をされるうち自然と涙を流され、無念さが忍ばれました。それでも都市生活の配送が再開されたことを喜んでいただき、逆に、元気つけられてお宅を後にしました。

<申請状況>

家屋の全半壊者（1万円）	： 254件
組合員本人で亡くなられた方（10万円）	： 1件
同居家族の亡くなられた方（5万円）	： 3件

*なお、既に転居されたり、避難されている方にもできるかぎり連絡をつけて申請をしていた
だくことにしています。

独居老人への炊き出し

伊丹地区 小川令子

3月15日から21日までの8日間、宮之上児童公園で炊き出しをさせていただきました。それまでは、近くの避難所でしていましたが、2日目から、この場所で炊き出しを続けることが、本当に喜んでいただけることなのかと疑問がわいてきました。といたしますのは、物資はどんどん届けられて山積みになって、その中には使い切れずに腐っているものも沢山見受けられたからです。そんな時、この地域の民生委員の方とお話しする機会があり、避難所に来たくてもいろんな事情で来なくて、救援物資ももらえないお年寄りが自宅にたくさんおられる様子をお聞きました。そのことを救援本部に報告しますと、ぜひ独居老人や在宅老人の多い場所で炊き出しをしてあげてくださいと、親切にアドバイスをさせていただきました。

その民生委員の方がさっそく地区の方々に声をかけてくださり、自治会長さん、婦人部部長さん、老人会会長さん、その他の地区の有志の方々がたくさん集まって下さいました。「都市生活」や大阪事業連、さらに最後のほうでは京都大谷高校の先生と生徒さんも応援に駆けつけて下さって、沢山の参加者の輪が広がり、宮之上児童公園での炊き出しが始まりました。みんなが独居老人や在宅老人に暖かくて、心のこもったものを食べて頂きたいという思いを一つに集めて、8日間の炊き出しができました。集まったすべての食材を無駄にすることなく、有効に活用させていただきました。炊き出し会場に来れない方には、民生委員さんの指示のもとで個別に配達もしました。

ある日、肉じゃがをお届けした時のおじいさんの話です。「これは有り難い、半分は夜の分に残しておいて、酒のあてににします。一人ではこんな物は食べられへんで」とたいへん喜んでくださったことを民生委員の方からお聞きし、私たちもとても嬉しい気持ちになりました。

また、あるおばあさんは「炊き出しをしてもらい、涙がでるほど嬉しい。それで何か形に表したいけれども、何もできないので」と言って、感謝とお礼の気持ちを込めて、アメ2個をエプロンのポケットにそっと入れてくださったと、お届けに行かれた方からお聞きしたときは胸が熱くなりました。

この活動を通して、人と人の交流の大切さを感じるとともに、地域の隅々にまで目の行き届、「都市生活」という暖かい組織があればこそと感謝しております。

避難所の食事を支援する東灘グループの活動

東灘区 春木 敏

予測をはるかに上回る被災の街を目の前にして、“何か、しなくては・・・”。ようやく、自分自身の生活が正常化した頃、「都市生活」の救援活動カードが目にとまりました。“炊き出しの食材と器具を提供します。”—あとは、スタッフさえ集まれば、“何かできる”—責められてるように仲間と相談。保健所管理栄養士、ボランティア・リーダー、在宅栄養士、仕事仲間、友人。

時期的に、いわゆる炊き出しの必要性は少なくなっていること、配給食料は野菜料理が皆無にちかいこと、自炊を始めている避難所があることなどから、避難者の自立援助を目的として“避難所のなかでできる栄養管理”をテーマとしました。

すなわち、配給食料に不足している緑黄色野菜（ビタミンA・C、鉄、食物繊維）や淡色野菜（ビタミンC、食物繊維）、小魚・海藻（カルシウム、鉄、食物繊維）、生鮮魚・肉・卵・大豆（良質蛋白質）を補う経済的な単品料理を紹介することです。

そして、過剰の食品となっているハム・ソーセージ、練り製品などの加工食品（脂質、食塩）やマヨネーズ、ドレッシングなど油脂類（脂質）を加減して食べましょうという情報伝達のパンフレットを配布しました。

救援物資の質の良さは、避難者の方々にもすぐ分かり、“とても美味しい”と好評をえましたことを併せて報告しておきます。協力生協のみなさま、ありがとうございます。

元のように個人の生活を確保することが最大の関心事である避難者の方々に、どれだけのインパクトをあたえられるか疑問ですが、“何もしない”よりは“何かをする”ことに意義を見いだしたいと思います。

「都市生活」と仲間と私、このすばらしいネットワークが“避難所の食事を支援する東灘区グループ”の活動を作りあげました。震災下でのほんの小さな活動ですが、いま私はネットワークのもつ大きなエネルギーに感嘆しています。

伊丹市・新光明自治会からの「都市生活」へのお礼状です

前略

此の度、都市生活協同組合の皆様のご延べ八日間に至る心温まる炊き出しをして頂き、地区住民に代わり心より厚く御礼申し上げます

炊き出しをして頂いた皆様も被害を受け、何かと大変な中、此の様なボランティアに活躍され、献身的な取り組みを拝見致し、深く感動すると共に、人間一人の方が如何に無力なものかとつくづく感じて居ります

日本が戦争に負け、廃墟の中から現在世界一、二の大国に成り得たのも勿論国民の勤勉さもある事乍ら、事に当りお互に協力し、和と連帯が有ったからだと思っております

今回の大災害で大きな被害が出ましたが、此の心が、連帯意識が有る限り、以前にも増して立派な都市が、町が構築されるものと確信しております。

最後になりましたが、八日間、小川さん始め各地より大勢の人が炊き出しに来られました。

此の皆様方にどうぞ宜しくお伝え下さい

今後又御世話に成ることも有ろうかと思っておりますが、其の節は又援助の手をさしおいて下さい

本当に有難うございました

四月三日

新光明自治会
会長 松原賢三

シャボン玉フォーラム'95 in KOBE

「食・暮らし・環境・地域発」環境型暮らし”を考える

全体会 4月22日(土)

基調報告「ポスト産業社会への一つの提言」

パネルディスカッション「チェック、私たちの選択」

生協「都市生活」からの報告—「阪神大震災と生協」

.....

分科会 4月23日(日)

「石けん入門」「価格破壊か適正価格か」「ソフトエネルギー」

尼崎労働福祉会館(阪神電鉄尼崎駅下車徒歩8分)